

『予防接種』

埼玉県さいたま市 吉村 史年

五歳になる息子を、妻と二人で予防接種に連れて行くことになった。私が小さい頃は、母に騙し討ちのようなやり方で会場に連れて行かれ、注射をされていた。子ども心に、それがとても不愉快だったので、息子には予め告げておくことにしている。

「今日、病院でチクンするからね」

案の定息子は怒りながら大泣きした。これは仕方がない。昨年もそうだったのだ。しかし、その後の反応が昨年と違った。

「ママとパパがチクンして、ボクは車で待ってる」

いや、君が主役だよと説得すると、今度は

「じゃあ、パパだけがチクンする」

と、五歳児なりに取引を持ち掛けてきたのだ。将来は刑事ドラマにある「交渉人」になれるかもと、親バカな考えが脳裏をよぎるが、そんな要求が通るはずもなく、却下した。

その後、少し落ち込んだ様子を見せていたが、注射の必要性をわかってもらおうと、病気の怖さを噛み砕いて説明すると、最後は納得してくれた。

車の後部座席に息子を乗せ、病院に到着すると、少し泣いたものの、昨年よりおとなしく注射を受けてくれた。一年、いや、一日ごとに息子の体も心も大きくなっていくのだなあ、しみじみ思った。

夜、お風呂の中で

「今日は偉かったねえ。チクン頑張ったよねえ」

と褒めてあげた。すると、息子は

「本当は行きたくなかったのに」

とまた少し泣いた。これも昨年にはなかった現象だが、記憶力が良くなったのだと、前向きに解釈することにした。